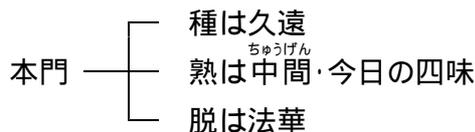
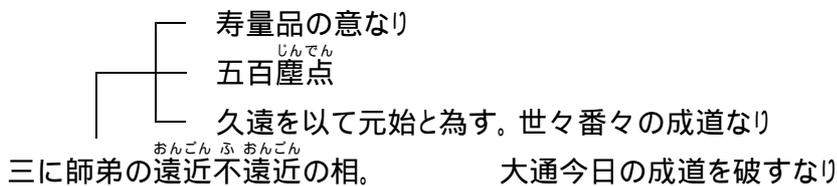
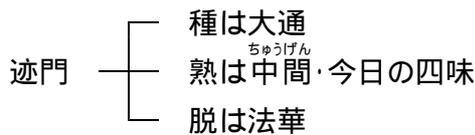
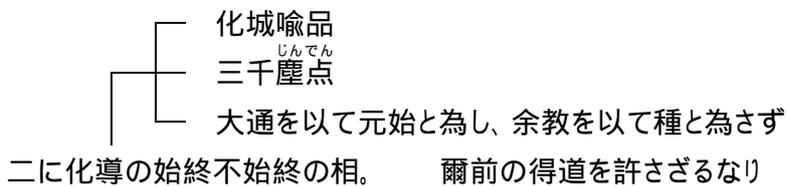
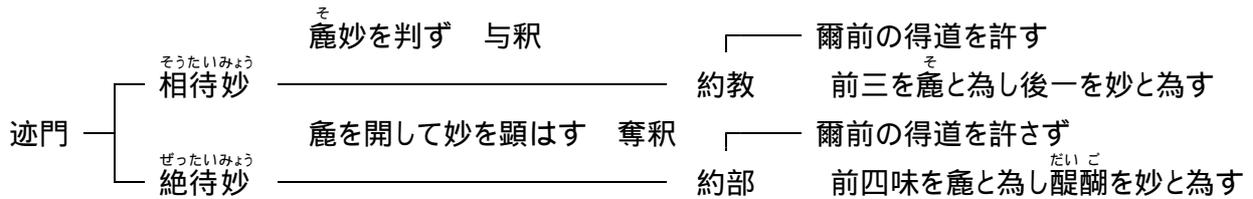
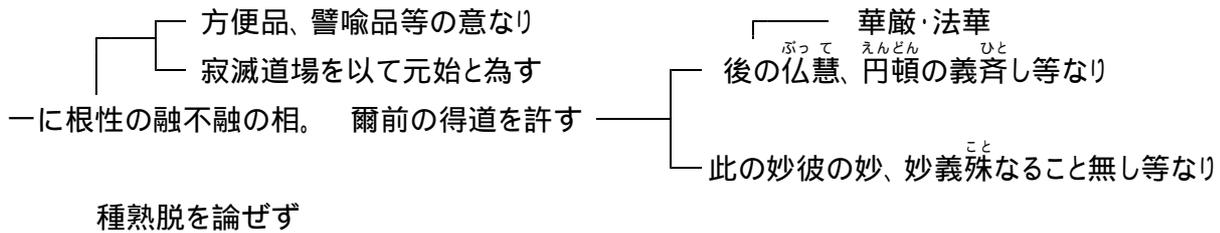


三種教相



玄の一に云はく「教相に三と為す。一に根性の融不融の相、二に化導の始終不始終の相、三に師弟の遠近不遠近の相」文。

籤の一に云はく「前の両意は迹門に約し、後の一意は本門に約す」文。

又云はく「初めの根性の中に二と為す。初めには八教を明して以て昔を弁じ、次には今經を明して以て妙を顕はす」文。

- 華嚴の円 ———— 別は^そ麤、円は妙
相待妙、麤妙を判ず
 - 方等の円 ———— 前三を麤と為し後一を妙と為す
相對妙、麤妙を判ず
 - 般若の円 ———— 前二を麤と為し後一を妙と為す
相待妙、麤妙を判ず
 - 法華の円 ———— 相待妙は、麤妙を判ず
絶待妙は、麤を開し妙を顕はす
 - 相對妙 ———— 約教 ———— 横待 ———— 前三を麤と為し後一を妙と為す
約部 ———— 縦待 ———— 前四味を麤と為し^{だいご}醍醐を妙と為す
- とうぶん
当分は相待妙
かせつ
跨節は絶待妙

籤の一に云はく「又今の文の諸義は、凡そ^{およ}一々の科、皆先づ四教に約して以て麤妙を判ずるときは、則ち前三を麤と為し後一を妙と為す。次に五味に約して以て麤妙を判ずるときは、則ち前四味を麤と為し^{だいご}醍醐を妙と為す。全く上下の文意を推求せずして、直ちに一語を指して便ち法華は華嚴より劣れりと謂へるは^{いくばく}幾許の誤りぞや、幾許の誤りぞや」文。籤の二に云はく「当分は一代に通じ、今に於て便ち相待を成ず。跨節は唯今經に在り、仏意は今に^{はじ}適むるに非ざるなり」文。

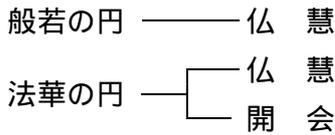
玄の二に云はく「此の經は唯二妙を論ず。更に非待非絶の文無し」文。籤の二に云はく「若し相待の中には展転して妙を明かせども前の麤猶存せり。今絶待を論ずるに、前の諸麤を絶して形待すべき無し」文。

- 華嚴の円 ———— 心法妙 ———— 相待妙
衆生妙 ———— 相待妙
仏法妙 ———— 相待妙
- 方等の円 ———— 心法妙 ———— 相待妙
衆生妙 ———— 相待妙
仏法妙 ———— 相待妙
- 般若の円 ———— 心法妙 ———— 相待妙
衆生妙 ———— 相待妙
仏法妙 ———— 相待妙
- 法華の円 ———— 心法妙 ———— 相待妙 ———— 絶待妙
衆生妙 ———— 相待妙 ———— 絶待妙
仏法妙 ———— 相待妙 ———— 絶待妙

玄の二に云はく「是の両妙を用て上の三法を妙ならしむ。衆生の法に亦二妙を具足す。之を称して妙と為す。仏法心法に亦二妙を具足す。之を称して妙と為す」文。

籤の二に云はく「二妙妙上三法とは、三妙の法華に在って方に妙と称することを得ることを明かさんと欲す。故に二妙を^{もち}須ひて以て三法を妙ならしむ。故に諸味の中に、円融有りと雖も全く二妙無し」文。

- 華嚴の円 ———— 仏 慧
- 方等の円 ———— 仏 慧

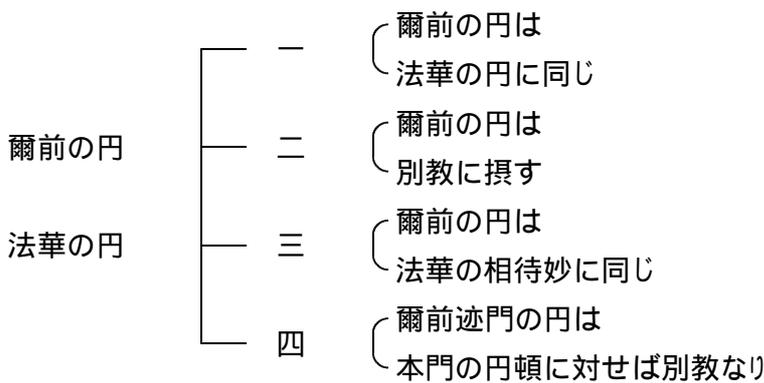


玄の二に云はく「此の妙彼の妙、妙義殊なること無し」文。

玄の十に云はく「初後の仏慧、円頓の義齊し」文。

文の句の五に云はく「今の如きは始めの如し。始めの如きは今の如し。二無く異無し」文。

弘の五に云はく「惑者は未だ見ず、尚華嚴を指す。唯華嚴円頓の名を知って、而も彼の部の兼帯の説に味し。全く法華絶待の意を失ひ、妙教独頭の能を貶挫す。迹本二文を験して五時の説を検するに円極謬らず、何ぞ疑ひを致すことを須ひん」文。



籤の三に云はく「若し祇但四教の中の円を判じて之を名づけて妙と為ば、諸經に皆是くの如きの円の義有り。何ぞ妙と称せざらん。故に須く復た更に部に約し味に約し、方に今の經の教円部円を顯はす。若し教に約せずんば則ち教の妙なることを知らず。若し味に約せずんば部の妙なることを知らず」と。

玄の三に云はく「当に知るべし、勝鬘の所説は次第を説いて浅きより深きに至れり。歴別して未だ融せず。乃ちは無量の四諦の中の無作なり。是発心畢竟二不別の無作に非ず」文。

籤の三に云はく「此は是別教教道の説。初発心畢竟二不別に非ず」文。

二に化導の始終不始終の相

玄の一に云はく「又異をいはゞ余教は機に当たって物を益す。如来施化の意を説かず。此の經には仏の教を設けたまふ元始巧みに衆生の為に頓・漸・不定・顕密の種子を作し、中間に頓・漸の五味を以て調伏し長養して之を成熟し、又頓・漸の五味を以て之を度脱することを明かす。並びに脱し、並びに熟し、並びに種すること番々に息まず。大勢威猛三世に物を益す、具に信解品の中に説くが如し。余經と異なるなり」文。籤の一に云はく「次に此の經より下は正しく今の經の意を明かす。且く迹中の大通を指して首めと為す。漸及び不定に寄すと雖も、余教を以て種と為さず、故に巧為と云ふ。結縁已後大を退して初めに迷ふ、故に復更に七教の中に於て調停の種を下せるを復巧為と云ふ。所以に中間に七教を受くることを得て長養し調伏せり」文。又云はく「又以より下は今世に復た七教を以て調伏して、法華に至て得度せしむことを明かす。故に度脱と云ふなり。並びに脱等とは多人に約して説く。彼に於ては是種なり。此に於ては是熟なり。互ひに説くこと知んぬべし。是の故に並びに及び番々不息と云ふ。此即ち初め及び中間今日等の相を結するなり。故に更に涌出を引いて迹の文を助顯す」文。又云はく「次に信解を指すことをいはゞ、即ち信解の中に、又以他日於窓牖中と云へり。即ち法身地に機を鑑みること久しきことを指

す。故に此の一の語に即ち三世益物の相を兼ねたり」文。止の三に云はく「若し初業に常を知ることを作さざれば、三蔵の帰戒羯磨悉く成就せず。若し此の釈を作るときは、大小の両經に於て義相違無し」文。又云はく「遠く根本を尋ねれば三乗の初業、法に愚ならず。若し四念処の聞慧を取って初めと為すは、此初めより真諦の常住を知る」文。弘の三に云はく「初めの文は且く久遠の初業を標す故に根本と云ふ。十六王子に結縁せざること莫し。且く迹の化を指す故に遠尋と曰ふ。若取の下は近く此の生に初めて四諦滅理の真常を聞くことを指す」文。又云はく「今日の声聞の禁戒を具することは、良に久遠の初業に常を聞きしに由ってなり。若し昔聞かずんば小尚具せず、況んや復大をや。若し全く未だ曾て大乘の常を聞かず。既に小果無し。誰か禁戒の具不具を論ぜんや」文。又云はく「羯磨不成と言ふは、所謂久遠に必ず大無くんば、則ち小乗をして法を乗ること成ぜざらしむ。本無きを以ての故に諸行成ぜず。樹に根無ければ華果を成ぜざるが如し。時機未だ熟せざれば権に小の名を立つ。汝等が所行は是菩薩の道なり。始めて記を得て方に大人と名づくるに非ず。故に知んぬ、心宝渚に趣くこと無くば化城の路一步も成ぜず。豈能く城に入って安穩の想ひを生ぜんや。常住を信ぜずば声聞の禁戒皆具足せずということ。此の言徴有り。此都て未だ大心を発こさざる者は則ち本無きことを成じ斥ふ。復た本無しと雖も受者の心に拗り、仏の本懐已に大化を施すに拗って有無の意須く審らかに之を思ふべし」文。又云はく「四念の初業は小に違はず。久遠の初業は大に違はず」文。籤の十に云はく「迹門は大通を以て元始と為し、本門は本因を以て元始と為し、今日は初成を以て元始と為す。大通已後本成已来是くの如き中間節々の施化なり」文。玄の十に云はく「是くの如き等の意、皆法身地にして寂にして常に照らす。始めて道樹にして大に逗じ小に逗ざるに非ず。仏智機を照らすこと其の来たるや久し」文。籤の十に云はく「法身地等と言ふは、本地の真因初住より已来、遠く今日乃至未来の大小の衆機を鑑みたまふ。故に本行菩薩道時所成寿命今猶未盡と云ふ。豈今日迹中の草座木樹にして方て今日の大小の機を鑑みたまはんや」文。又云はく「一代始成四十余年にして豈能く彼の世界塵数の菩薩、万億の諸大声聞をして便ち大道を悟りて現に無生を獲せしめんや。色声の益略して称記し難し。故に知んぬ、今日の逗会は昔成熟の機に赴く。況んや若しは種、若しは脱、言の尽くすべきに非ざるをや」文。玄の一に云はく「夫理は偏円を絶すれども、円珠に寄せて理を談ず。極は遠近に非ざれども宝所に託して極を論ず。極会し円冥して事理俱に寂なり」文。籤の一に云はく「理絶等とは、既に開顕し已はれば偏円の名を絶す。華嚴・方等・般若の偏円に對し明かすに形へんが為に、往法華絶待の縁を結び、今は円珠に寄せて絶理を談ず」文。又云はく「法譬二周の得益の徒は往日結縁の輩に非ざること莫し」文。

三に師弟の遠近不遠近の相

玄の一に云はく「又衆經には咸く道樹にして師の実智始めて満じ、道樹を起って始めて権智を施すと云へり。今經には師の権実道樹の前に在りて久々に已に満ぜりと明かす。諸經には二乗の弟子実智に入ることを得ず、亦権智を施すこと能はずと明かす。今經には弟子實に入ること甚だ久しく、亦先より解して権を行ぜんことを明かす。又衆經には尚道樹の前の師と弟子と近々の権実を論ぜず、況んや復た遠々をや。今經には道樹の前の権実長遠なることを明かす。補処世界を数ふるに知らず、況んや其の塵数をや。經に云はく、昔未だ曾て説かざる所、今皆當に聞くことを得べし。慇懃に称歎すること良に所以有るなり。當に知るべし、此の經は諸教に異なることを」文。籤の一に云はく「次に今經の下は今經の一体権実久々に已に満ずることを明かす。迹中の三千界の墨点すら尚已に久しと為す、況んや今の本の中の五百億の塵界をや。故に久々と云ふ。又一節已に久し、況んや節々相望するをや。故に久々と云ふ」文。